実習報告（基盤実習）

自己調整学習を見据えた「効果的な振り返り」の研究
－振り返り指導方略を通して－

中村　涼太（子ども支援探究コース　生徒指導・教育相談系）

【探究実習のテーマと設定の理由】

私は，大学院 2 年間を通した研究テーマを「自己調整学習を見据えた「効果的な振り返り」の研究－振り返り指導方略を通して－」とした。大学院 2 年間を通した研究テーマを踏まえて，探究実習のテーマを「学びを自分事とするための支援の在り方に関する探究」と設定した。本テーマを設定した理由は，児童があらゆる学びと関わる過程において，学びの背景にある事柄に目を向けることで，「学びのおもしろさ」や「学ぶ目的」に気付くことができるような支援を講じたいと考えたからである。

【探究実習の研究目標】

探究実習における研究目標は「実習校の児童の実態に即した学習の個性化を図る」である。大学院 2 年間を通した研究テーマに「自己調整学習」という言葉を取り入れたように，学習者が自己の学びを知ろうとすることや，学びに対して能動的に関わろうとすることが，「自己調整」の一因になり得ると推察する。そこで，「自己調整」の視点を基に，学習者の学びを学習者自身で促進することができるようにするには，「学習の個性化」が必要であると考えた。学習の形態や方法等を吟味し，学習の場面に応じた「学びの場」をどのように構築する必要があるのか。また，学習の個性化を図ると，学習者や指導者にどのような効果がもたらされるのか，という視点に沿った取組を基に，研究目標を達成できるように学びを進める。

【探究実習の概要】

探究実習では，1 年次は「基盤実習」，2 年次は「学校課題探究実習」を行い，現場での教育実践を通して，今日の教育に求められる複雑化・多様化する諸課題への対応力を育むことを目標とする。1 年次に実施する「基盤実習」では，私が設定した探究実習のテーマである「学びを自分事とするための支援の在り方に関する探究」を軸として，個々の実習に「サブテーマ」を設けた。サブテーマについては，「リーダーシップとフォロワーシップ」や「主体性」等の「学習に向き合うための視点」に関するものを挙げた。さらに，「逆向きの視点」や「児童の学び方」等の「学習を進める際の工夫」に関するものにも焦点を当てた。1 年次での「基盤実習」では，これらのサブテーマを踏まえ，実習校の教育活動の側面にも触れることができた。配属学級での授業観察，授業への参加，掃除指導，給食指導等に携わらせていただいた。また，特別支援学級での児童との交流もさせていただき，多様なニーズを抱える児童の実態を学ぶことができた。

2 年次での「学校課題探究実習」では，1 年次の「基盤実習」を踏まえたうえで，より実践的な課題の探究に当たる。主に，実習校での教育的な実践を重ね，昨今の教育が抱える諸課題をどのように解決していく必要があるのかを考察する。また，「大学院 2 年間を通した研究テーマ」の要素も織り込みつつ，“学習者の自己調整”と“今日的な教育の課題”がどのように関わり合っているのかを探る。

【探究実習の成果と課題】

1 年次の「基盤実習」では，「学びを自分事とするための支援の在り方に関する探究」というテーマの下，教育現場が抱える諸課題への見方・考え方を持つことができた。特別支援教育，ICT，アクティブ・ラーニング，不登校等，教育が抱える課題は複雑化・多様化の一途を辿っており，課題を解決するための明確な方法が定かでなはいと私は考える。このような状況で，学習者がどのような学びを展開する必要があるのかを考察する際に，「学びの自分事」という視点が不可欠であるという考えに至った。まずは，目の前の学びを学習者自身で捉え，課題を見出すことから始める。その課題を解決するために必要な考え方や方法を，個として，集団として明らかにする。この流れに，「学びを自分事とするための手がかり」があると推察する。

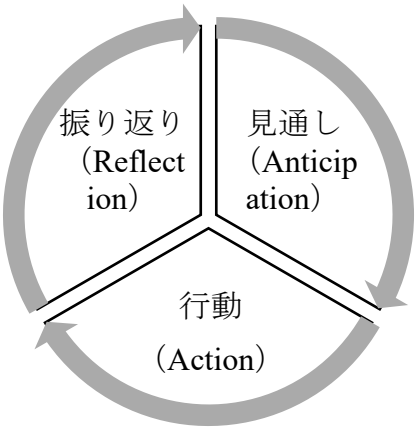

図 1　AAR サイクル（白井, 2020）

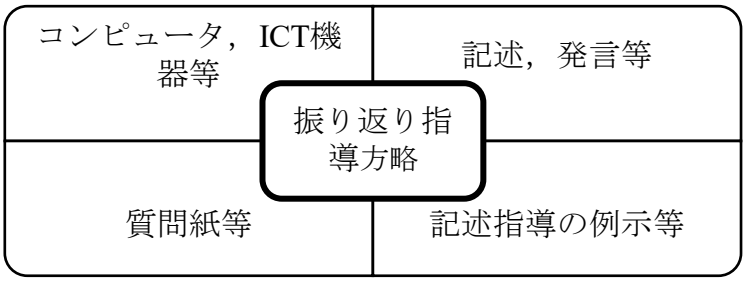

図 2　振り返り指導方略（仲井，2022）

図 1 は，学習者が，継続的に思考を改善し，意図的かつ責任ある形で行動することができるような反復的な学習プロセスを明らかにするためのサイクルである（白井，2020）。この AAR サイクルを活用することで，「学びの自分事」を引き出すための支援を具体化する一助になり得ると想定する。学びにおける「見通し」が，学習者の動機付けとなり，「行動」への踏み台になる。さらに，学習場面に応じた「行動」を生み出すことで，学習者の能動的な「振り返り」へと繋げる。ただ，学習段階には個人差があるので，AAR サイクルを用いることで「学びの自分事」を学習者に確実に意識付けることができるとは言い難い。換言すると，学習者の「学びの自分事」を引き出すための支援を，学習者の実態に即して行うことを念頭に置き，学習者の目線で学びを深化することができるようにする必要があると言えよう。

2 年次の「学校課題探究実習」では，1 年次で得た知見を基に，学習者が「自己の学びの舵取り」ができるような実践を重ねる。学習者が，自らの手で学びの舵取りを担うということは，自己調整だけではなく，学びへの能動的な働きかけを促すためにも必要な視点であると想定する。また，大学院 2 年間を通した研究テーマの中核を担う「効果的な振り返り」を明らかにするためにも，学習者の実態に応じた「学び方」を考案し，学習者の「学びの自分事」を具体化してゆく。

図 2 は，学習者の「振り返り」を促すための「振り返り指導方略」である。図 2 の指導方略を用いることで，学習者の学びだけではなく，「指導者の学びの振り返り」を焦点化することが期待できると想定する。つまり，学習場面に応じた「振り返り指導方略」を用いることで，学習者と指導者の双方が自己の学習活動を省察することができると言えよう。

以上を踏まえて，探究実習では，学習者と指導者の双方が，「学ぶ目的」の視座を揃えるための土台を，自己調整と振り返りの観点から明らかにする必要性があると捉える。また，「学ぶ目的」を，学習者の言葉で表現できるような環境が，学習者の学びを自分事とする契機になると言えよう。